

## 復活されたイエス様との出会い

2008. 3. 25 (火)

ベック兄メッセージ (メモ)

### 引用聖句

ヨハネの福音書 20章1節

さて、週の初めの日に、マグダラのマリヤは、朝早くまだ暗いうちに墓に来た。そして、墓から石が取りのけてあるのを見た。

### 11節から18節

しかし、マリヤは外で墓のところにたたずんで泣いていた。そして、泣きながら、からだをかがめて墓の中をのぞき込んだ。すると、ふたりの御使いが、イエスのからだがかかっていた場所に、ひとは頭のところ、ひとは足のところ、白い衣をまとってすわっているのが見えた。彼らは彼女に言った。「なぜ泣いているのですか。」彼女は言った。「誰かが私の主を取って行きました。どこに置いたのか、私にはわからないのです。」彼女はこう言ってから、うしろを振り向いた。すると、イエスが立っておられるのを見た。しかし、彼女にはイエスであることがわからなかった。イエスは彼女に言われた。「なぜ泣いているのですか。だれを捜しているのですか。」彼女は、それを園の管理人だと思って言った。「あなたが、あの方を運んだのであれば、どこに置いたのか教えてください。そうすれば私が引き取ります。」イエスは彼女に言われた。「マリヤ。」彼女は振り向いて、ヘブル語で、「ラボニ (すなわち、先生)。」とイエスに言った。イエスは彼女に言われた。「わたしにすがりついてはいけません。私はまだ父のもとに上っていないからです。わたしの兄弟たちのところに行って、彼らに『わたしは、わたしの父またあなたがたの父、わたしの神またあなたがたの神のもとに上る。』と告げなさい。」マグダラのマリヤは、行って、「私は主にお目にかかりました。」と言い、また、主が彼女にこれらのことを話されたと弟子たちに告げた。

### 24節から29節

十二弟子のひとりで、デドモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたときに、彼らといっしょにいなかった。それで、ほかの弟子たちが彼に「私たちは主を見た。」と言った。しかし、トマスは彼らに、「私は、その手に釘の跡を見、私の指を釘のところ差し入れ、また私の手をそのわきに差し入れてみなければ、決して信じません。」と言った。八日後に、弟子たちはまた室内におり、トマスも彼らといっしょにいた。戸が閉じられていたが、イエスが来て、彼らの中に立って、「平安があなたがたにあるように。」と言われた。それからトマスに言われた。「あなたの指をここにつけて、わたしの手を見なさい。手を伸ばして、わたしのわきに差し入れなさい。信じない者になら

ないで、信じる者になりなさい。」トマスは答えてイエスに言った。「私の主。私の神。」イエスは彼に言われた。「あなたはわたしを見たから信じたのですか。見ずに信じる者は幸いです。」

私たちにとり一番大切なことは、「復活なされたイエス様にまみえ、新たにされること」ではないかと思えます。パウロは、「主イエスは、最後に私に現われてくださった」と言って、よみがえりの主にお会いした喜びでいっぱいでした。私たちも、「主に新しくお会いしたい」のではないのでしょうか。

パウロはなぜイエス様を知るようになったのでしょうか。ご存じのように、彼は、最高の教育を受け、聖書学者そのものでした。もちろん当時は旧約聖書しかなかったのですが、彼は聖書を100%信じた男でした。しかし未だイエス様に会ってはいなかったため、救われていなかったのです。彼はいかにしてイエス様を知るようになり、信じるようになり、イエス様を宣べ伝える者となったのでしょうか。理屈で攻められ、納得させられたからなのではありません。脅かされ、強制されたからでもありません。「復活なされたイエス様」にお会いしたからです。イエス様によって監禁され、捕えられてしまったからです。

パウロがなぜイエス様を紹介する者となり、イエス様の証し人となったかと言いますと、よく聖書を勉強したからではありません。「復活なされたイエス様」に出会ったからです。ですからパウロは、「よみがえりの書」と呼ばれているコリント第一の手紙15章を、当時の兄弟姉妹に書き送りました。なぜかと言いますと、それは彼らにとってどうしても必要だったからでした。

コリントの兄弟姉妹は一度救われたのですが妥協し、主にだけ頼ろうとしなかったため、「主に用いられる器」ではなかったのです。ですからパウロは、彼らにこの「よみがえりの書」を送ったのです。もちろん彼らは復活なされたイエス様を信じました。しかし彼らは、実際生活での「よみがえりの主」の力を知らなかったのです。相変わらず自分の力に頼って頑張ったのです。そうすると、うまくいくはずはありません。彼らは「主のために生きたい」という気持ちはあったでしょうが、何をしても失敗に終わってしまいました。

パウロは、イエス様の恵みによって救われた、このコリントの人々の失敗の根本原因について、はっきり言ったのです。「あなたたちは、『よみがえり』を体験する前の状態にあります。『よみがえりの土台』の上に生活していないので、うまくいかないのです」と。もし私たちが生まれつきの性質から解放されず、イエス様のよみがえりの力に合わせられていないなら、信仰生活は上がったたり下がったりするでしょう。

ペテロ、ヤコブ、パウロなど「よみがえりの主イエス様」に会った多くの人々は、自分の肉の力から解放され、御霊に動かされる生活に引き入れられるようになりました。彼ら

が告白していますように、このことこそ彼らにとって本当の意味でのイースター、復活祭だったのです。パウロは、コリントの兄弟姉妹も、同じ「よみがえり」の体験に入ることを願って、この手紙を書いたのです。

私たちも様々な悩みを通して、問題を通して、苦しみを通して、この主の驚くべき力、よみがえりの力を体験的に自分のものとする必要があるのではないのでしょうか。

主にお会いして、復活なされたイエス様のご愛により新しく変えられた四人の人々を、聖書から見てみたいと思います。

\*第一番目。マグダラのマリヤ。

彼女はよみがえりのイエス様にお会いした最初の人でした。よみがえりの主にお会いすることによって彼女は何をいただくようになったかと言いますと、「全く新しい愛」です。彼女は、墓から復活されたイエス様に最初にお目にかかりました。本当に恵まれた者でした。彼女はなぜこのすばらしい特権にあずかることができたのか、聖書は何も記していませんのではっきり言えませんが、敢えて言えることは、イエス様を一番愛し、イエス様に全てを捧げ尽くしたからではないかと思われまふ。なぜ一番初めに、イエス様はマリヤに現われなされたのか、更に考えられることがあると思います。それは、彼女が一刻も早く復活なされたイエス様を見る必要があったからです。彼女はイエス様が死なれたときがっかりして、完全に絶望してしまったのです。「もうお終い」と。マルコ伝の16章9節を見ると、次のように書かれています。

マルコの福音書 16章9節

さて、週の初めの日の朝早くによみがえったイエスは、まずマグダラのマリヤにご自分を現わされた。イエスは、以前に、この女から七つの悪霊を追い出されたのであった。

この節を読むと、彼女はかつてイエス様に七つの悪霊を追い出していただいたことが書かれています。マリヤは悪霊に憑かれて、恐ろしい生活をしていたに違いありません。喜びもなく、平安もなく、希望もなく…。しかしイエス様との出会いによって、彼女は解放されました。ですから、イエス様に悪霊を追い出していただいたとき彼女が体験した解放も、素晴らしいものだったに違いありません。この主イエス様に対して、マリヤが持っている愛の全てを捧げ尽くしたのは、当然でしょう。無理もないことです。イエス様こそ、マリヤのすべてでした。イエス様無しには生活できないほどだったでしょう。イエス様が十字架上で死なれた時の彼女の悲しみは、とても言葉では言い表わせなかったでしょう。ですから、もしイエス様がよみがえられなかったら、マリヤの「イエス様に対する愛」はなおさら彼女を絶望に追いやり、悲しみに落とし込んだに違いありません。マリヤの愛の対象は間違っていなかったのです。神の御子主イエス様を愛し抜いていたからです。しかしその愛が、「よみがえりの力」に基づかない人間的な愛であるなら、絶望に終わってしまうことになります。

現われてくださったイエス様を見たとき、彼女は喜びのあまり、イエス様に抱きつこうとしました。聖書を読むと、そのときイエス様はマリヤに、「わたしに触ってはいけない」と御声をかけられたことが書かれています。イエス様はなぜそのように言われたのでしょうか。イエス様はマリヤに、肉による愛、人間の愛を霊による愛に変えなければならないことをお教えになりたかったのです。イエス様が後に昇天される時、マリヤの愛を霊による愛に変えていただくための備えをしてくださったのです。私たちもイエス様に対する愛や献身が、よみがえりの土台の上に立っていなければ、やがてそれらは崩れて絶望に終わるでしょう。イエス様のよみがえりは、イエス様に対する「新しい愛」を与えてくださいます。もし、よみがえりの前の土台に立っているなら、イエス様とともに十字架につけられ、イエス様と共に葬られていない人です。マリヤがそうでした。マリヤの愛は、本当にきれいな清い愛でしたが、人間の愛でした。

では、マリヤのこの愛を少し考えてみましょう。

- ・まず、マリヤの愛は、イエス様が自分に成し遂げてくださった恵みのみわざに応える愛でした。マリヤは七つの悪霊を追い出していただいたので、感謝の思いからイエス様を愛しました。
- ・二番目に、マリヤが愛したイエス様は肉体をとっておられたので、目に見えるお方としてのイエス様を愛していたのです。マリヤは、目に見えるイエス様を愛していました。
- ・最後に、このマリヤの愛は人間的でしたから、絶望に終わってしまいました。

これに対し、「よみがえりの主」に出会い、「よみがえりを土台として」その上に立っている人は、苦しみを通し、悩みを通し、主とともに十字架につけられて死に、主とともによみがえらせられ、天の座に着かせられた人で、まことの主なる神の愛をいただいた人です。

よみがえりのイエス様に会って、新しく主への愛を持たせていただいた者は、

- ・まず、「イエス様ご自身」を愛します。それらの人たちは、イエス様を知っています。イエス様との交わりを持っています。イエス様のみ旨を知って、イエス様だけを喜びとしています。
- ・次に、よみがえりに基づいた人々は、目に見えないイエス様を愛します。すなわち信仰によって歩みます。

まことの喜びの土台とは、まことの愛の土台なる秘訣とは何でしょうか。

コリント人への手紙・第二 4章16節から18節

ですから、私たちは勇気を失いません。たとえ私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。今の時の軽い患難は、私たちのうちに働いて、測り知れない、重い永遠の栄光をもたらすからです。私たちは、見えるものではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。

・最後に、この主への愛は、たとえわけがわからないことがあっても、理解に苦しむようなところに置かれてもなお愛して、愛し貫く愛です。

これらの人々は、パウロと同じように次のように言うことができるでしょう。すばらしい箇所です。

ローマ人への手紙 8章35節から39節

私たちがキリストの愛から引き離すのはだれですか。患難ですか、苦しみですか、迫害ですか、飢えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか。「あなたのために、私たちは一日中、死に定められている。私たちは、ほふられる羊とみなされた。」と書いてあるとおりです。しかし、私たちは、私たちが愛してくださった方によって、これらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利者となるのです。私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちが引き離すことはできません。

主なる神の愛は、すべてのものに勝ち得て余りある愛です。この主の愛は、パウロがコリント第一の手紙13章で書いている愛です。

コリント人への手紙・第一 13章4節から7節

愛は寛容であり、愛は親切です。また人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません。礼儀に反することをせず、自分の利益を求めず、怒らず、人のした悪を思わず、不正を喜ばずに真理を喜びます。すべてをがまんし、すべてを信じ、すべてを期待し、すべてを耐え忍びます。

私たちの場合はどうでしょうか。私たちは主のためにあれをしたりこれをしたり、奉仕しますが、本当にイエス様と親しい交わりをもっている兄弟姉妹はどれだけいるのでしょうか。祈りはそのままイエス様との交わりである、と言い切る事が出来ないかもしれません。イエス様も私たちに語りかけることがお出来にならなければ、「交わり」とはなりません。私たちがマリヤのように、よみがえりの前の土台に立っているのかもしれない。マリヤはイエス様を神の御子として信じ、しかも自分を悪の霊から解き放ってくださったお方として信じ、愛していました。しかし、彼女はがっかりして絶望してしまいました。

現在多くの救われた兄弟姉妹が、罪の赦しを確信し、主なる神との平和をいただいています。そして、人間的な愛でイエス様を愛しています。生まれながらの賜物と力をもってイエス様に仕えようとしています。しかし信仰生活はとめどもなく、上がったたり下がったりします。イエス様との本当の意味での交わりがなく、イエス様と一つになることができずにいるそれは、よみがえりの前の土台に立っているからです。

「よみがえりの土台」に立つ者は、自らの力で主に仕えようとしません。自分の力に頼ることをやめ、人間の誉れを望まず、復活なさったイエス様にまかせてお委ねする、ということは何という自由でしょう。

自分を愛する愛は哀れっぽい愛です。自分を愛する愛は傷つきやすいものです。主の愛はこれに対して傷つきにくいものです。主の愛はしるしを求めません。主の愛は、信仰によって目に見えないものを望み見て歩みます。私たちが今差し迫って必要としている愛は、この新しい主の愛なのです。

もしイエス様がよみがえられなかったら、果たしてマリヤは七つの悪霊に立ち向かうことができたのでしょうか。よみがえりの土台に立っていないコリントの兄弟姉妹たちは、どうだったのでしょうか。憎しみ、ねたみ、傲慢と汚れの霊に打ち負かされ、全く証しがたっていませんでした。イエス様が私たちにマグダラのマリヤのように「新しい愛」を授けられ、私たちが心からパウロのように、「よみがえられた主は、最後にこの私に現われてくださった」と喜ぶことができたなら、本当に幸いなことと思います。

\*第二番目。イエス様のよみがえりの姿を拝して、新しくされたペテロ。

ペテロはよみがえりの主にお会いし何を得たかと言いますと、「新しい信頼」です。イエス様のよみがえりは、ペテロのすべてとなりました。もしイエス様がよみがえられなかったら、ペテロはどうなっていたでしょう。ペテロはイエス様を公然と否認しました。「私はイエスを知らない。何のことかわからない」とイエス様を裏切ってしまいました。ペテロは特に主のみそば近く歩み、三年半イエス様に愛されるという特権にあずかり、いろいろな忠告をイエス様の口から聞くことができ、しかも、「私は決してイエス様を捨てない」と誓ったにもかかわらず、ペテロはイエス様を否定してしまいました。ペテロが否んだイエス様は十字架の上で死なれました。地上でペテロを助ける者は一人もいません。「よみがえりのイエス様」だけが、ペテロを助けることがお出来になったのです。マルコ伝16章に、「…とペテロ」という表現が出てきます。

マルコの福音書 16章6節、7節

青年は言った。「驚いてはいけません。あなたがたは、十字架につけられたナザレ人イエスを捜しているのでしょうか。あの方はよみがえられました。ここにはおられません。ご覧なさい。ここがあの方の納められた所です。ですから行って、お弟子たちとペテロに、『イエスは、あなたがたより先にガリラヤへ行かれます。前に言われたとおりに、そこでお会いできます。』とそう言いなさい。」

よみがえられたイエス様は使いを送り、ご自分のよみがえりを弟子たちに告げられましたが、特にペテロの名前を挙げて、「イエスはよみがえった。今から弟子たちとペテロのところへ行ってこう伝えなさい」と言っておられます。

ペテロは主を否んだままイエス様に死なれたので、全くぺちゃんこになって打ちのめさ  
れていました。もし、「弟子たちとペテロ」と、ペテロの名前を特別につけて名指しで呼ば  
れなければ、ペテロは立ち上がれなかったでしょう。他の弟子たちは、ペテロは主を裏切  
ったのだから私たちの群れには縁のない者だ、とペテロを軽蔑していたかもしれません。  
ペテロがイエス様を否んでから、他の弟子たちはペテロを指導者として仰ぐことをやめて  
いたかもしれません。ペテロは信頼を失ってしまいました。このペテロに対する不信頼を  
解くために「弟子たちとペテロ」と、ペテロの名前を特にイエス様は付け加えられたに違  
いありません。

私たちはペテロと同じではないでしょうか。ペテロは私たちの間で例外ではなく当たり  
前のことようになってはいないでしょうか。もし私たちがよみがえりの前の土台に立っ  
ているなら、何か大きな試みがくると簡単にイエス様を否んでしまうのです。私たちは偽  
りやすい自らに信頼することは絶対にできません。初めは決心し誓っても、自分の決心は  
いつしか崩れ、裏切るといった結果になってしまいます。

ペテロは指導者となるべくイエス様から召しを受けましたが、今のペテロはイエス様を  
否み、イエス様の弟子であるかどうかさえ疑われています。しかしイエス様のよみがえり  
はペテロをどん底から救い出しました。ペテロはもとのペテロになりました。他の名前も  
持つようになったのです。ペテロは見事に立ち直ったのです。ペテロは主を否むという悲  
しむべき出来事を通して、自分の真相を知ることができました。主を否んでからイエス様  
がよみがえられるまでの三日間は、どれほど暗い日々だったことでしょうか。おそらく眠れ  
ず、食べることも出来ず、真っ暗でした。夜そのものだったことでしょうか。しかし、この  
真っ暗闇を通される必要があったと思われれます。もしペテロに「よみがえりの主」が現わ  
れてくださらなかったなら、ペテロは絶望し、立ち上がることができなかったでしょう。

私たちもイエス様に用いられるためには、ペテロと同じ体験を経なければならないこと  
でしょう。私たちは「自我に満ちた生活」をやめ、主と共に生きる「よみがえりの土台」  
に立たされることができたら本当に幸いです。よみがえりの主はペテロに現われてくださ  
り、二人で何かお話しし合ったはずですが、その時主はペテロに何をお語りになったか、  
聖書に記されていないのが残念です。（しかし、いつかもちろんわかるようになります。）

ルカの福音書 24章34節

「ほんとうに主はよみがえって、シモンにお姿を現わされた。」と言っていた。

とあります。この箇所によると、イエス様はシモン・ペテロと親しくお話しになったこと  
だけはよくわかります。私たちは主イエス様とペテロが何をお話ししたか、知る由もあ  
りませんし、その必要もないでしょう。私たちはペテロと同じように主に対して不真実であ  
り、不信頼に満ちた心の持ち主であることを教えていただかなければなりません。それを

教えられて初めて、後に見事に立ち直ったペテロと同じようになることができるのです。ペテロは火を通された後、実にゆるがない、その名前のように、「岩のようなキリスト者」になりました。ペテロは多くの人々の信頼を受けるに足る信者になったのです。

「よみがえりのイエス様」はペテロを新しくし、ペテロは「イエス様に対する新しい信頼」を持ち、また多くの人々に信頼される人と造り変えられました。今、私たちが差し迫って必要としていることの一つは、その「主に対する新しいより頼み」です。

\*第三番目。よみがえりのイエス様にお会いし、著しく変えられたトマス。

トマスは新しい信仰を与えられました。トマスはもともと、疑問に満ちた疑い深い性質の持ち主でした。

ヨハネの福音書 20章24節から25節

十二弟子のひとりで、デドモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたときに、彼らといっしょにいなかった。それで、ほかの弟子たちが彼に「私たちは主を見た。」と言った。しかし、トマスは彼らに、「私は、その手に釘の跡を見、私の指を釘のところに差し入れ、また私の手をそのわきに差し入れてみなければ、決して信じません。」と言った。

他の弟子たちは、イエス様のよみがえりを知って喜び、これを仲間のトマスに伝えたのですが、トマスは断固として信じようとしませんでした。個人的な疑いは、イエス様に親しくお目にかかるまで解けません。聖書を読んでいきますと、よみがえりの主は疑い深いトマスのために、わざわざもう一度現われてくださったことがわかります。何という恵み深い主でしょう。自分のこの指をイエス様の手と足とわき腹の傷に差し入れてみないうちはイエス様のよみがえりを信じる事が出来ないと言っていたトマスは、目の前に現われてくださったイエス様のみ姿を拝した時、指を傷に当てるどころか、ただその場にひれ伏してイエス様を拝した、礼拝した、と聖書は記しています。

疑い深いトマスがこんなに変えられたのは驚くべきことです。彼はまことの礼拝者になりました。トマスは疑惑に満ちた者でしたが、「新しい光」が与えられたならこの疑惑が解けるのだが…、と絶えず「光」を求めていました。ではイエス様は、なぜもっと早くトマスに現われてくださらなかったのでしょうか。それはもちろんトマスが悪かったからです。他の兄弟、弟子たちと一緒にいなかったからです。もしトマスが兄弟のところに帰って来ないでそのまま自分の道を歩んだなら、イエス様にお会いすることが出来なかったばかりか、悲しい結果になってしまったでしょう。

主イエス様は「救われた者一人一人のかしら」であられるばかりではなく、信じる者の群れ、すなわち「ご自分のからだなる教会のかしら」です。ですからイエス様は、兄弟姉妹がともに集まり心を一つにして御名を讃美しているところに、ご自分を現わされる場合が多いのです。

トマスの疑いそのものはひどく悪いことではないでしょう。トマスはたしかに「疑い」でしたが、正直な男でした。彼はイエス様のよみがえりを信じる事が出来なかったので、自分を偽らずに、はっきり信じられないと言ったのです。多くの人々は信じられないのに、あたかも信じたかのように自分を偽って進みます。トマスはこれらの人々より、よほどまじだったのです。

私たちはそれぞれ問題を与えられています。またこれからも与えられるでしょう。その中には「よみがえりの主」が現われてくださらなければ、どうしても解決できない問題にぶつかることが必ずあります。そのような時は、トマスのように、心から「新しい光」を求めましょう。そうすれば必ず、「よみがえりの主」が問題に解決を与えてくださいます。トマスは「新しい光」を求めて、それを受け入れる備えをしていました。またトマスは、イエス様を信じる仲間に入って一緒に先へ進むことを拒まなかったのです。トマスは疑いながら交わりに加わっていました。そしてイエス様がトマスに現われてくださったとき、トマスは主イエス様の御前にひざまずきました。私たちの過去を振り返ってみると、本当に主に対して不信仰であり、イエス様を悲しませた者であることがわかります。私たちが今日、今一番必要としているものは、「よみがえりの主」に「新しくお会いし、新しい信仰をいただく」ことではないでしょうか。

\*第四番目。最後に短くヤコブについて。

ヤコブはよみがえりの主にお会いして何を得たかと言いますと、「新しい義」です。  
コリント人への手紙・第一 15章7節前半

**その後、キリストはヤコブに現われ、**

と書いてあります。このヤコブは、ご存じのように血縁ではイエス様の弟でした。後に、このヤコブは、「義人ヤコブ」と言われるようになり、エルサレムの初代教会の一人の長老になった者です。彼の書いた手紙、ヤコブ書を読むと、ヤコブは「正しさ」、つまり「義」を強く主張していました。ヤコブが長年心に持っていた悩みは、イエス様の義を自分は持っていない、自分の持っている義は「掟の義」、「自分の義」だけだ、ということでした。

彼は、生まれるなり神の御子であるイエス様を兄として一緒に暮らしていながら、イエス様を批判し、最後には拒んだでしょう。たぶん彼はイエス様が罪人と一緒に食事をし、掟を守らず、安息日を守らないでいたところから、当時のパリサイ人たち、聖書学者たちと同じようにイエス様を拒んだに違いありません。イエス様を理解出来なかったからです。  
ヨハネの福音書 7章5節

**兄弟たちもイエスを信じていなかったのである。**

と書いてあります。ヤコブは、イエス様の生きておられる間イエス様を信じませんでした。

信じようとしなかったのです。このイエス様を受け入れなかったヤコブも、ついにイエス様を受け入れる時がやってきます。イエス様は今、十字架の上で苦しんでおられます。苦しみの中からイエス様は、弟子ヨハネに向かって、「ヨハネよ、見よ。これはあなたの母である」と言ってご自分の母マリヤを弟子のヨハネに託されました。続いて母のマリヤに向かい、「女よ、これは汝の子です」と言って、ヨハネに生涯の面倒をみてもらうように話されました。イエス様はなぜ、ご自分の母を自分の弟であるヤコブに託さないで、ヨハネに託されたのでしょうか。初めからイエス様を信じていた母マリヤと、ヤコブとは仲が合わず離れて生活をしていたでしょう。ですから自分を生んでくれたマリヤであっても、イエス様がヤコブには任せられず他人に委ねなければならなかったとは、ヤコブにとってひどく悲しいことだったでしょう。これは、おのれを正しいとする罪の結果です。「自分を義」とする結果はいつも悲劇そのものです。この世の人でさえも、信仰のゆえに自分の母を見捨てるなどということはしないでしょう。しかし「自分を義」としたヤコブは母を見捨てました。ヤコブはこのように「おのれを正しい」とする男でした。

パウロはコリント第一の手紙15章に、よみがえりの主イエス様がだれとだれとだれに現われてくださったか、順序を追って書いていますが、ヤコブの名前は後のほうに書かれています。イエス様は、「おのれを正しい」とするヤコブより先に、罪人や取税人に現われてくださったのです。けれどもヤコブの身に終に奇跡が起こりました。ヤコブは、「自分を正しい」とすることは何の役にも立たず、むしろ妨げになることを悟り、イエス様の前に碎かれ、「新しい義」をいただいたのです。

多くの人々は、「おのれを義」とし、盲目になり、かつてのヤコブのように悲惨な状態に陥っています。よみがえりの主だけが、「自分を義」とする心から解放することがお出来になりました。私たちも「よみがえりの主イエス様に新しくお会いする」ことによるのみ、ヤコブと同じように「義人」と呼ばれることが出来ます。

最後にパウロは、主イエス様が自分に現われてくださったことを書いたのです。

コリント人への手紙・第一 15章8節

**そして、最後に、月足らずで生まれた者と同様な私にも、現われてくださいました。**

パウロはよみがえりの主にお会いして、新しい愛、新しい信頼、新しい信仰、新しい義を受けたのです。

私たちもパウロのように、「そして最後に、よみがえりの主は私に現われてくださったのです」と喜びをもって言えるようになれば、本当に幸いではないでしょうか。よみがえりの主イエス様にお会いしたら、私たちの生活は根底から変えられます。

イエス様は、私たちに「よみがえりのいのち」、また「よみがえりの力」を与えるために、死からよみがえられたのです。イエス様が与えてくださる「よみがえりの力」を受けるとき、そこから「新しい愛」と、「新しい信頼」と、「新しい信仰」と、「新しい義」が湧き出てくるのです。私たちはコリントの兄弟姉妹がそうであったように、理論や知識ではなく、実際に主の御前にひざまずき、砕かれ、「主の備えられるよみがえりの力」を受け取りたいものです。

イエス様が実際によみがえられたのなら、「イエス様のよみがえりのいのち」、また「イエス様のよみがえりの力」は、私たちのために備えられて隠されています。このよみがえりのいのちは、私たちの生まれながらのいのちと全く性質を異にするものです。このいのちは、マリヤのうちに、また、ペテロ、トマス、ヤコブ、パウロのうちに宿ったいのちであるばかりでなく、「私たちの内にも宿っておられるイエス様のよみがえりのいのち」です。

イエス様が私たちに、マリヤのように新しい愛、ペテロのように新しい信頼、トマスのように新しい信仰、そしてヤコブのように新しい義を授けられ、私たちがパウロのように、「よみがえりの主は最後にこの私に現われてくださった」と心から喜ぶことが出来るなら、本当に幸いと思います。

了